

競争の場における多様な地域文化の創出

——戦後の沖縄におけるエイサーの競演に着目して——

岡本 純也 一橋大学大学院商学研究科准教授

I. はじめに

本報告では、いわゆる「民俗舞踊」「民俗芸能」と呼ばれる地域社会に存する文化が、競争の場に投げ込まれることによってどのような変化を遂げるのか、また、競争の場はそのような身体的文化を包含する地域社会に対してどのようなインパクトを与えるのかというテーマを、沖縄の盆踊りのエイサーの事例を通して考える。

沖縄の盆踊りであるエイサーは、戦前から沖縄本島の各地で踊られてきた舞踊である。「ニンブチャー（念仏者）」や「チョンダラー（京太郎）」と呼ばれる、芸能を携えて沖縄に流れ着いた下層の宗教者によって各地に伝えられたといわれており¹、多くの場合、念仏系の曲節をそのレパートリーに含み込んでいる。戦前の踊りの様態は沖縄本島各地で異なっていたようであり、①国頭村などの北部地域：女性だけで踊られる手踊りを中心にしたエイサー、②本部半島を中心にした地域：男女で踊る手踊りのエイサー、③沖縄市や与勝半島など中部地域：太鼓を中心にした男性主体のエイサーといった分布がみられた²。しかしながら、戦後になると太鼓を叩きながら踊る中部地域型のエイサーが各地で踊られるようになった。また、それまでエイサーを踊っていなかった地域でもエイサーを取り入れて旧盆に踊るようになっていった³。

このような沖縄全体の旧盆の風景を一変させるような大きなインパクトをもったイベントとして語られるのが、コザ市で1956年に開始された「エイサーコンクール」である。このコンクールでは、各地のエイサーが一つの会場に集められ、審査員によって順位付けがなされた。踊り手である青年会の競争への熱狂が大きく、22回で「競演形式」

を放棄し、順位付けをしない「まつり形式」へと転換⁴したこのイベントは、地域の旧盆の習俗の中では決して起こらなかったであろう変化をエイサーにもたらした。すなわち、複雑な隊列の変化や新しい民謡の取り込み、衣装の変更などである。

では、なぜエイサーコンクールは、踊りとしてのエイサー、そして、沖縄各地の盆の風景を変えるほどにインパクトをもったのか。このような問いに答えるため、ここでは1956年にコザ市で開始されたエイサーコンクールとその後の全島規模に拡大した競演形式のイベントの流行に着目して考察をおこなっていきたい。

II. 戦後のエイサーの変化

民族音楽研究者であり、エイサー研究の第一人者、小林幸男は、戦後のエイサーの変化について以下のような指摘を行っている⁵。

「戦後しばらくの時点では、北部一帯は手踊エイサー、中部では太鼓エイサーに手踊エイサー地域が混在していた。太鼓エイサーが中部を席卷し、太鼓をフィーチャーした芸能として成熟するのは、コザ市発足の一九五六（昭和三一）年に『全島エイサーコンクール』が始まって以降のことである。

コンクールは市街発展の目玉の一つとしてコザ商工会が発案し、市と共催したものである。中部の土地の多くが米軍用地として接収される一方、センター街など新しい基地経済の町が生まれる中で、沖縄芝居の興業（マ）が盛んになり、土地闘争を含め青年会活動の盛り上がった時期でもあった。コンクール以来、コザ市を中心とした中部の

各青年会は互いに見栄えのする装束や太鼓の技を一層競い合うようになり、<念仏>曲に至るまでの入場の演出や曲のレパートリーに工夫を凝らした。戦前からの曲を伝承する字ばかりでなく、民謡を入れ替えたり新民謡を取り入れて、全体を新たに振り付けし直す字も現れるようになった。隊列もマーチング・バンドのような変化に富んだ隊形が工夫され、ショウ・アップが進んだ（筆者も『衣装が派手すぎる。伝統を損なわないで欲しい』『入退場に時間がかかりすぎる』と力説していたコンクールでの審査員の講評を思い出す）。太鼓エイサーは一九六四（昭和三九）年、那覇の『全島エイサーまつり』が始まる頃から影響力を更に拡げ、南部・北部各地にも次々と弟子エイサーを生み出すようになった。中部の太鼓エイサーが全島の夏の風物詩を代表する時代が到来したのである。今日では、名護の『北部エイサー祭り』など、全島にエイサーの催しが定着しつつあるが、殆どが太鼓エイサーで占められるようになっている。（下線引用者）

ここで小林が指摘しているエイサーの戦後の変化は以下の諸点である。

- ①太鼓を中心にしたエイサーが中部から面的に広がり、北部へ、そして南部へとエリアを拡大していった。
- ②入場の演出や曲のレパートリーに工夫を凝らすようになった。
- ③伝承されてきた曲以外に新民謡を取り入れたり、新たな振り付けを行う地域もみられるようになった。
- ④隊列もマーチング・バンドのような変化に富んだ隊形が工夫され、ショウ・アップが進んだ。

そして、これらの変化の要因として、①「中部の土地の多くが米軍用地として接収される一方、センター街など新しい基地経済の町が生まれる中で、沖縄芝居の興業（ママ）が盛んになり、土地闘争を含め青年会活動の盛り上がった時期でもあった」と社会的な条件を上げ、また、②「コザ市を

中心とした中部の各青年会は互いに見栄えのする装束や太鼓の技を一層競い合うようになり」とコンクールの中の「競争」を指摘する。すなわち、ここでは戦後に成立した「コンクール」の①外側のロジック（社会・経済的論理）と②「コンクール」の内側に存在したロジック（プレイの論理）によってエイサーの変化がもたらされたことを示唆しているのである。

そもそもエイサーは旧暦の盆に「祖霊を慰める」ということを名目に踊られる地域の行事である。その中核となる踊りが劇的に変化するということは、地域の盆行事の風景を一変させることにもなる。つまり、一年に一度、特定の場所で開催される「都市のイベント＝コンクール」が沖縄本島全体の盆の風景を書き替えるだけのインパクトをもっていったということである。コザ市のエイサーコンクールは、エイサーという芸能（舞踊）の大きな変化と関連して語られるが、しかしながら、それは単に「芸能」の変化にとどまらず、民俗的なローカルな空間が現代的なシステムの中でどのような変化を遂げていったのかという視点で分析する必要があるように思われる。

そしてその際には、エイサーコンクールという競演の場が成立することによって、それを中心にした「社会的なプレイ」の構造がどのように広がっていったのかを、その内側の論理と外側の論理に注目して観察する必要がある。ここでは、外側の論理、すなわち戦後の沖縄においてコザ市が「基地の町」として人々を多く集めて拡張していったことや、1956年当時、米軍の基地拡大政策に反発して沖縄全体を巻き込んだ「島ぐるみ土地闘争」の集会が頻繁に行われていたこと、その最中に「琉米親善」を冠して第一回のエイサーコンクールが催されたこと等に関する記述については概略にとどめ、エイサーコンクールの内部の論理がどのようなものであったのかに焦点化して記述したい。

III. 競争の場の成立

コザ市のエイサーコンクールのスタートは1956年。コザ市が創立した直後に開催された。当時、開催の中心にいた富本裕盛氏は以下のように発足の経緯について語っている⁷。

「戦後十余年、ようやく人心も落ちつきを取り戻し、コザ市（現沖縄市）も街の形態が整った。東はコザ十字路、照屋の商店街。中心では胡屋十字路、センター通り、空港通り。南は諸見里大通り、百軒通りで、それぞれに商業都市が形成された。商工会も結成され、商店街の宣伝活動も盛んになっていった。当時、私はコザ市の議員で商工会の専務理事も兼任していた。商工会の役員と相計り、将来の街の発展に寄与する中部独特の年中行事を模索していた。そこで思いついたのが、エイサーである。中頭では古くから部落毎にエイサーがあり、エイサーによって部落の交流もなされていた。又、戦前から角力闘牛も盛んであったので、エイサー、角力、闘牛の三つの行事を実施する事で商工会員の了承を得た。観客の地域配分を考慮して、コザ十字路、照屋商店街は角力。胡屋十字路センター通り、空港通りは、エイサー。諸見大通りは、闘牛を実施することとした。エイサーについては当時、コザ小学校の校庭の隣りに、市内各戸の戦没者の慰霊碑が建立されたのでエイサーによる慰霊奉納の目的もあって、コザ小学校で実施された。エイサーコンクールは、毎年盛況をきわめたが、角力、闘牛はいつの間にか立ち消えとなっている。エイサーコンクールの第一回は一九五八年（引用者注：正しくは一九五六年）八月であった。参加者は地元コザ市内のエイサーをはじめ、遠く勝連村、与那城村や石川市、具志川市等からの参加をいただき盛況をきわめた。又、新聞広告で、沖縄本島北部や島尻方面からも観客がつめかけ、万余の人出となり、コザ市内の食堂では夕方には品切れをきたしたという。……回を重ねる毎に数万の観客にふくれあがるので、商工会では運営面に無理があり、主催をコザ市当局にお願いし、琉球新報社、商工会議所等の協力を得て実施することとなり、場所も運動公園で実施することで定着し、

今日の発展を遂げている。」

富本氏が述べているように、この時期、コザという街は急速に発展を遂げていた。1950年代に入り、アメリカによる恒久的基地建設政策が進められていくと、基地建設に関わる土木建設業者・労働者の集中、米兵相手の飲食店街の発達により、コザ市の前身である越來村では人口の増加や都市化が急激に進むこととなった。1951年に19,000人余りであった人口は1955年には35,000人を越えるほどになっていた⁸。こうして基地依存経済の中で短期間に農村から都市へと変化した越來村は、1956年7月1日、18日間のコザ村の期間を経てコザ市となる。コザ市主催の第1回「琉米親善エイサーコンクール」が開催されるのはそれから2ヶ月もたたない8月26日であった。

エイサーコンクールの第1回の開催を報じる新聞記事を読むと、このイベントがその後現在まで60年以上も継続して開催されるとは思えないような、短期間に即席で創られたものであったことが理解できる。

「コザでもエイサー

コザ市当局、商工会、文化協会、青年会の四者は廿二日昼三時市会議室で『コザ市エイサー・コンクールと演芸大会』に就て打合わせ会を持ち、来る廿六日コザ小学校グラウンドで盛大に催すことにきめた。最近社会問題で市民が暗い表情をみせているので一つエイサーで明るい気持ちを取り戻し市建設に励もうというのがその主旨。

△期日 エイサーあさ十時、演芸大会午後六時

△参加団体 エイサーは市内外を問わず趣旨に賛同するもの。演技は一団体三十分とする。

△申込み 廿五にち商工会宛

△入選 コンクールの部＝一位五千元、二位三千元、三位二千元で各一点。その他全員に参加賞。演芸大会の部＝各団体に金三百円。

なお当日三軍高官市内外各団体長、市内高齢者を多数招く⁹。」

エイサーコンクールの開催について主催者の

「コザ市当局、商工会、文化協会、青年会」の四者の打合せが行われたのがこの年の8月22日であり、その4日後に第1回目のコンクールが開かれている。このようなことが可能だった背景には、エイサーというものが伝統的な沖縄の盆の習俗として実施されていたということがあったといえるであろう。この年の旧暦の盆は8月18日、19日、20日であり、コンクール開催の時期にはすでに各地の青年会は踊りを仕上げているとみることができる。すなわち、エイサーコンクールとは、そのスタートの段階で地域の伝統的文化を前提にして成立したイベントであったのだ。とはいえ、新聞による告知から3日で9つの参加団体を集めて開催されたのであるから驚くべきであろう。

第1回のコンクールの盛況について報じる新聞記事を見ると、綿密な準備をする期間もなく即席でつくられたイベントであるにも関わらず、この新たな都市型の祝祭が人びとに歓迎されたということが読み取れる。

「人出三万コザのエイサー比ベ

コザ市役所、同商工会、同文化協会、共催の米流親善エイサー・コンクール大会は二十六日午前十一時からコザ小校校庭で賑かに催された。この日は日曜日とあって朝早くから隣接町村からも見物人がつめかけ人出約三万、山手の台地は日傘の群れでうずまっていた。

来賓席にはバージャー首席民政官夫妻はじめ軍高官の顔もみえた。参加団体はセンター、西里、西森、千原、倉敷、天願、比嘉の七青年会、勝連村平敷屋、与那城村屋慶名東区青年会の二団体は時間のつごうで特別参加として出演。それぞれ炎天下の下、伝統の踊を競い合った。なかでも特別参加の平敷屋、屋慶名のエイサーは数時間も踊りまくるといわれるだけ(あ)って●●なもの。二重に円陣をつくっても会場におさまりかねるといった大世帯。黒づくめの服にタスキ姿もりりしい鼓持ちの男、ねえさんかぶりに浴衣かけのあでやかな平敷屋男女混成チームの威勢のいいかけ声に手ぶりよろしく校庭一杯にエイサー気分をただよ

わせば万雷の拍手、オフ・リミッツ以来、よどんでいた陰●な空気もどこへやら、コザの街も久しぶりに明るい表情をとりもどした気持ちだった。ひきつづき午後五時から同校校庭で市内各区演芸会が開かれ西森区の『かぎやで風』『花笠』越来区の『谷茶前』と十六区が選り抜きの出し物を演じておそくまで賑わった。エイサーコンクールの成績次の通り。

一位-勝連村比嘉区青年会

二位-嘉手納村千原区青年会

三位-コザ市西森区青年会¹⁰

(引用者注：●は不鮮明な文字。以下同様。)

見出しに「人出三万」とあるように、第1回のエイサーコンクールには、多くの人びとが押し寄せた。新聞記事には写真も掲載されており、そこには会場となったコザ小学校の校庭の周りの小高い丘が観客で覆い尽くされている様子がみてとれる。他の新聞記事の情報も合わせると、その後、第2回も3万人、第3回は6万人と観客の数は増加していった。

ではなぜ、エイサーコンクールは多くの人びとを惹きつけ、順調に成長していったのであろうか。その背景にはエイサーというものが、伝統的な盆の習俗として行われてきたということが関わっているであろう。

沖縄の「盆」も沖縄以外の地域の盆と同様に、この時期に冥界からもどってくる祖先の霊を供養する一連の行事である。旧暦の7月7日に墓の掃除を行い、その後、7月13日に祖霊を親戚が集まって迎え(ウンケー:お迎え)、7月14日には祖霊と一緒に過ごし(ナカヌヒー:中の日)、7月15日の夕刻に祖霊を送り出す(ウークイ:お送り)。基本的に盆とは共通の祖先をもつ家(親族の集団)の行事であるが、地縁・血縁が強い沖縄においては、地域共同体(沖縄では「シマ」と呼ばれる)の行事としても重要となる。したがって、祖霊を供養するという名目で踊られるエイサーの踊り手となるのはシマの青年会¹¹の男女となる。

エイサーは盆に関わる踊りであるがゆえに、人

びとは自分の祖先と関わる土地において、その地のエイサーを見て楽しむことが基本となる。複数のエイサーを目にすることがあっても、自分のシマの周囲のエイサーをいくつか見ることがあるくらいであろう。そのような従来のエイサーを見るという経験に対して、エイサーコンクールでは、さまざまな地域のエイサーを1箇所の会場に集め、それらを比較鑑賞するという新しい経験を観客に提供した。そしてそれが、地域間の競争であったということも、人びとを熱狂させた原因であったであろう。このような従来のシマの習俗では味わえない新しい経験が人びとを惹きつける大きな要因となったと考えられる。

次にエイサーコンクールの場での競争がどのようなものであったのかについて見ていきたい。

IV. エイサーコンクールにおける「競争」

エイサーコンクールでは一定の審査基準が設けられ、審査員がその基準をもとに点数を付けて順位が決められた。新聞記事に掲載された審査規定を見ると、毎年、同様な項目について審査がされていたことが理解できる。1958年の第3回コンクールの審査規定は以下のように新聞の紙面上に掲載されている。

- 「一、服装（品位、美的、簡素）
- 二、体形（マ）（整然、変化、美的構成）
- 三、態度、技能（団体行動、精錬度、明朗、品位、威勢）
- 四、伴奏（技能、音声、品位、明朗、節度）
- 五、変化（従来＝古的、現代的）

なお、一チーム三十名以上、チームの所要時間は四十分¹²⁾

第8回の審査規定はより詳細に記述されているが、審査の項目は第3回とそれほど変わらない。

「審査の方法はほぼ昨年と同じで大きな変更はな

い。審査は①服装②隊形③態度技能④伴奏⑤構成⑥人員といった六項目を基準にして、総合点から減点方式で採点する。審査の方法次のとおり。

▽服装（品位、美化粧、簡素といった面からエイサーに適した服装かどうかをみる）

▽隊形（整然、変化、美、編成といった面から採点するが、集団舞踊としてのエイサーの意義から踊り全体の調和と統一のとれた編成美が主要な審査の対象となる）

▽態度技能（団体行動、精錬度、明朗、品位、威勢といった点からエイサーの技能が評価される。また、太鼓の打ち方、手おどり技術も審査の対象。エイサーは元来が規律正しいおどりで勇ましくほがらかなもの。こうしたエイサーの要素も評価する）

▽伴奏（曲目、技能、品位、節度、音声といった面から総合的な音声の調和をみる）

▽構成（古典、創作、組み合わせといった面から古典ものと最近作の曲節の取り合わせと、おどりの調和を採点する）

このほか、今年からは三十分の制限時間を一分間超過するごとに総合点から減点される¹³⁾。

エイサーコンクールの審査規定の特徴として、青年会の創意工夫を奨励しつつ、一方で「あるべきエイサー」像を想定し、教育的に方向付けをしていこうという方針がとられていたということが指摘できる。「エイサーに適した服装かどうか」、「集団舞踊としてのエイサーの意義から」、「エイサーは元来が規律正しいおどりで勇ましくほがらかなもの」という表現からは、「一定の工夫は認めるが、理想的なエイサーの枠に収める」ことが望まれているということが見てとれる。

このような審査基準のもとで行われるコンクールの中では青年会によるさまざまな工夫が実践されることになった。以下にそのいくつかの例について、当時の紹介記事からみていくが、実はこのような各地のエイサーを紹介する記事もコンクールの競争の場をつくりあげる重要な要素として存在していたといえる。そもそもコンクールの開始

の段階から、新聞は①開催の告知、②参加者の募集、③結果の公表といった情報を掲載しており、プレイの外側にいるというよりも内側で競争の場を盛り上げる存在になっていたといえよう。第8回からは琉球新報社が共催に入り、「メディア・イベント」¹⁴としての特徴は明確になっていった。以下、少し長めに各地のエイサーの紹介記事を引用するが、それはあたかもメディア・イベントの典型とされる「甲子園野球」のチーム紹介記事のようでもある。当地のエイサーの特徴を紹介しつつ、その年の「見所」について焦点化していく。そのような新聞記事からは、まさに競争の場をつくる当事者として新聞社が関わっていたということが読み取れる。

①勝連村平敷屋西青年会の事例

「平敷屋西青年会のエイサーは素朴である。

テンポのおそい踊りと沈むような鈍い太鼓のひびき統制の取れた隊列の調和美、手おどりの動作など、すべてに純朴さが見られるおどりだといわれる。平敷屋のエイサーは東西を問わず総体的に伝統性が重んじられるが伝統のある古典的な舞踊はしばしば素朴さを温存するごとく西青年会の素朴なエイサーも古さの中から生まれた所産だといえる。

伝統と素朴のミックスは重厚なたくましいおどりになっている。徳村賢昌青年会長は西青年会のエイサーを“勝連半島から吹き上げてくる潮風のたくましさにも似て力強いもの……”とそのダイナミックさを評している。……このエイサーは必ず入場の曲“秋のおどり”で始まり、“祝い節”で終わるのが昔からの慣わし。最近では民謡のおどりの取り入れるようになったが、どんなに時代が変わっても『入り端』と『んじ端』の曲は変わらないのが伝統を重んずる西青年会エイサーの誇り。

しかし、いくら伝統と素朴さを“ニシキの御旗”にしても若い青年たちのシャープな感覚はつい口ずさむ軽快なリズムの民謡に走りがち。民謡の“ひやみかち節”と“デイゴ音頭の(マ)”が十八番というのもうなずける。こうした思想を反映したか、

最近、曲節は新しいもの。紺地姿(クンジー)の衣装やおどりの動作、隊列、入退場の曲節など基本的なものは古いものでいこうとする新旧折衷型の新スタイルのエイサーが生まれつつあるという。

今年はこの新スタイルを生かして民謡の“でいご音頭”をおどりながら“(平)”の人文字を描く新企画が考えられている。これは“平和”と平敷屋の“平”を意味するもので外円の輪が平和の“輪”をあらわす。エイサーで永遠の世界平和を祈ろうというもの。

“平和”の人文字は太鼓打ち二十八人で“平”の字を書き、手おどりが輪を作る。青年たちはこれが西青年会の自慢ですと自信たっぷりでおどりの手を休めようとしな¹⁵い。

平敷屋西区のエイサーは伝統を重んじながら、その中で、新しい曲を取り入れながら工夫をこらし、この年(1963年)にはエイサーを踊りながら「人文字を描く新企画」が取り入れられたという。このような新しい要素の考案が促進されたのはコンクールという競争の場が創出されたからであろう。特に隊列の工夫は各青年会が力を入れていたようで、先に引用した小林が「隊列もマーチング・バンドのような変化に富んだ隊形が工夫され、ショウ・アップが進んだ」と指摘するような状況がエイサーコンクールを通して進行したと考えられる。

②与那城村西原区事例

「与那城村西原区 現代性生かし創作 各地の長所取り入れて

与那城村西原区(島袋真一会長)のエイサーは創造性に富んでいる。パーランクー(タイコ)の打ち方、動作はやや屋慶名、平敷屋のエイサーに似ているが各地のよいところだけを取り入れ、自分たちで創作したという。たとえば、パーランクーを打つにしても、サッと手をあげ大きく一回打ったあと、三回ほど前に手を動かし、全体の調和をとる。足の動きも前後左右に小さく動いて、舞踏的。

このパーランクーだけで約●人もそろっているのだから美しい。同区のエイサーはこのタイコ打ちを中心に男女青年が向かい合って昔から伝わるエイサー踊りを展開する。

出羽の時に謳うのは同区青年会がつくったという『英雄アマワリ築きたる、勝連城のそのもとで…』という同区青年会の歌を京太郎節の曲に合わせ一列になって出てくる。これも節の変わり目には一人おきに左右に動いて変化をもたすなど昔から伝わるエイサーも現代を加味させている。

同区は昨年もコンクールに出場、惜しくも入賞できなかったもので、ことしこそは入賞してやろうと毎晩十二時すぎまで、約六十人の青年たちが練習にはげんでいる¹⁶⁾。

与那城村西原区の紹介記事からは、当地の青年会がさまざまな工夫を凝らしているということが読み取れる。そして「各地のよいところだけを取り入れ、自分たちで創作した」といった記述からは、他の地域のエイサーが参照の対象となっているということが理解できる。また、当地の地理的条件などを歌い込んだ曲を創作するなどの工夫からは、他地域のエイサーが参照の対象としてだけでなく差別化の対象として意識されているということも分かる。コンクールの場合は、このように、一つのシマの中の世代間で踊りを「伝承」していくという様式を、他の地域のエイサーとの関係の中で「自分たちのエイサー」を作っていくという様式へと変えていったといえよう。

③具志川村赤野区の事例

「リズムあふれ独創的 百年以上の歴史を持つ 具志川村赤野青年会の『赤野エイサー』の名は、今ではエイサーファンで知らぬものはない。パーランクーによるリズム感にあふれた踊りは、独創的な力強いものがある。

……全島エイサー大会に初出場したのが、一九五九年。以後、毎年上位を占めている。……赤野エイサーは出場するたびに隊形や楽器、歌のフシがちがいがい、そのつど新鮮さが加えられている。中

でも隊形の移り変わりは調和のとれた美しさが感じられる。照屋源松同区長は『エイサーは伝統的な民俗芸能だが、伝統にこだわる必要はない。青年会員が楽しく踊れることが第一だ。そのためにも伝統的な踊りよりレクリエーション的なものがよい』と説明する。これは服装や曲フシにも現れている。昔から受け継がれてきた紺地(クンジー)も、最近ではワイシャツにトレーニングズボンと簡素で、活動的なものとなり、現代的な感覚を出し、これが大衆の気持ちにピッタリするところが赤野エイサーの人気のある原因だろう¹⁷⁾。

赤野青年会の紹介記事からは、青年のさまざまな工夫を地域の人びとがどのようにとらえていたのかが理解できる。同区の区長の「エイサーは伝統的な民俗芸能だが、伝統にこだわる必要はない。青年会員が楽しく踊れることが第一だ」という言葉からは、青年会が自分たちで作っていくエイサーについて地域の人びとも受け入れていたということが読み取れるのである。

IV.コンクールの地域への影響

これまで見てきたように、エイサーコンクールの中では青年会によるさまざまな工夫が促進され、従来のシマのエイサーとは異なる新しい服装や隊形、踊り方などが取り入れられていった。それらの新しい要素の取り込みは、先に見た与那城村西原のように、他の地域のエイサーを参照枠(模倣の対象)としたり、また、ライバルの地域を差別化の対象として意識しながら進められていった。コザ市のエイサーコンクールという競争の場が、各地のエイサーにもたらした大きな影響力の源泉は、「自分たちのエイサー」をつくっていくために、他の地域のエイサーを模倣、差別化の対象として意識するようになったことであろう。戦前からエイサーが踊られていた地域であっても、上の世代の踊りをそのまま踏襲していくという伝承スタイルではなく、他の地域のエイサーとの関係でその時

代の青年会が「自分たちのエイサー」を作っていく。このようなエイサーのあり方を規定していったのは、エイサーコンクールという競争の場のロジックである。エイサーコンクールの出現は、地域間のエイサーの相互連関性を強め、それまで地域共同体という文脈において規定されていた服装、隊形、踊り方などが他の地域のありようによって影響を受け、共鳴するといった状態をもたらしたのである。

そして重要なのは、このような競争の場がコザ市だけに留まらず、各地の「競争の場＝コンクール」を作り出していったことである。コザ市のエイサーコンクール開始以降、市町村単位で同様なイベントを行う地域が増えていった。新聞記事から読み取れる各地のエイサーコンクールの開始時期を以下に示す。

- 1959年 具志川村商工会主催
「全島エイサーコンクール」
- 1961年 美里村青年団協議会主催
「部落対抗エイサーコンクール」
- 1962年 那覇市
「全島エイサー大会」
- 1964年 読谷村青年団協議会主催
「村内エイサー大会」
- 1964年 沖縄県青年団協議会主催
「沖縄エイサー大会」
- 1965年 具志川市青年団協議会主催
「エイサー大会」
- 1967年 羽地村青年会主催
「羽地村エイサー盆踊り大会」
- 1968年 宜野湾市
「宜野湾市エイサー大会」
- 1969年 勝連村青年連合会主催
「青年エイサー大会」

これらのイベントは近代スポーツとは異なり、「統一のルール」のもとに組織化されていくこと一すなわち、大小さまざまな試合が決勝へと収斂していくプレイの時空間の組織化—はなかったが、

それぞれのコンクールごとに順位付けを行い「優秀なエイサー」を決めていった。競争の場で示される「優秀なエイサー」は、各地域の青年によって目指される存在となることは必然であった。このことにより、小林が指摘するような「太鼓エイサーが中部を席卷し、太鼓をフィーチャーした芸能として成熟する」という現象を生じさせたと考えられる。そして、沖縄全体へと太鼓のエイサーを拡げていくことになる。以下の記事は、本島南部の喜屋武のエイサーが中部地域の屋慶名からエイサーを習い覚え、地域の「伝統」としたことを紹介している。

「地域に定着した喜屋武エイサー」

糸満市喜屋武のエイサーが四日と五日の両日、にぎやかに催された。今年は“エイサーをはじめてから十五周年”目にあたり、それを記念して、区民、青年会とも一段と力のはいった踊りを披露した。喜屋武エイサーは、もともと移入の伝統行事。本場の屋慶名から指導員を招き始めたものだが、毎年回を重ねるごとに充実。十年ほど前から本場顔負けの技を習得、すっかり地域に定着した●●となっている。踊る青年たちの表情もはつらつ、新しい伝統を築きつつある。……始めたのは昭和四十年。これまで同地域には旧来の盆行事はあったが、男衆が酒びたりとなるとあつて不評も。そこで健康的な行事を—ということ始めたのがエイサー。当時の部落有志が与那城村屋慶名に向き指導を願った。太鼓、パーランクールの鳴らし方から踊りの振り付けまで教えてもらい、なんとか一回目のエイサーにこぎつけた。同区の島元一雄区長は「まがりなりにもエイサー行事をもった。とはいっても形だけのものだったが、青年たちには熱意があった」と述懐する。以来シーズン前になると毎年指導を受け、一人前になるには十年の歳月を要した。十年目あたりから教わった本場エイサーに独自の振り付けをおりこむなど、そこから“喜屋武カラー”を打ち出し、とみに評価は高まった。島尻の喜屋武エイサーから県内でも有数のエイサーに成長。十五周年を迎えた青年たちの

誇りは自信に満ちている¹⁸。」

記事にあるように、糸満市喜屋武のエイサーは1965年（昭和40年）に与那城村屋慶名（現うるま市与那城屋慶名）からエイサーを習って開始された。そして、その教わったエイサーを糸満市大里と豊見城村（現豊見城市）保栄茂に教えている¹⁹。もともと太鼓を使ったエイサーは沖縄本島中部を中心にした盆の踊りであり、南部では盆の行事はあるものの踊りはなかった地域がほとんどである。しかし、喜屋武、大里、保栄茂のように、コザ市のコンクール以降、踊り始める地域が多く出てきた。このような現象もエイサーコンクールの影響であると考えられる。

V.まとめにかえて

これまで見てきたように、コザ市のエイサーコンクールは、旧盆の民俗的な習俗を前提に急拵えにつくられたにもかかわらず、沖縄本島全体に対してインパクトを与えることとなった。90年代以降、沖縄以外の地域へこの舞踊が普及し、町田や新宿などでもエイサーまつりが行われるようになったことを考えると、コザ市のコンクールの歴史的な重要性がいっそう理解できる。年に一度、一つの会場で行われるイベントがどうしてそのような影響力を持ったのであろうか。

それを理解する上で「甲子園野球」をモデルとして考えることは有効であろう。1915年に全国中等学校野球大会が大阪の豊中球場（第3回～9回は鳴尾球場、第10回からは甲子園球場）で始まると全国の野球少年たちは、この大会を目指すようになった。真夏の炎天下で催されるあの大会は、新聞社が主催になったということもあり、特別な磁場を生み出し、全国の野球に励む少年の主体的な努力を引き出していった。ここでの要点は、甲子園大会という年に一度の競技会と少年たちの関係の捉え方である。この大会があることによって、全国の本戦に出られないような少年たちも日々の練習に励むようになったはずである。「競争の場」

は全国的な広がりをもっており、この競争の場を通じて、見ず知らずの少年たちの身体は互いに影響関係をもち、結びつけられる。朝日新聞が開始当初より「武士道野球」を強調し、「日本的野球」の範型を示した一犠打などのチームに対して「犠牲となる」プレイを賞賛したり「ひたむきさ」「純真さ」を強調する記事を掲載した一ことによって全国の野球少年たちのプレイスタイルに影響を与えられたのはこのためである²⁰。

同様に、コザ市のエイサーコンクールが創り出した「競争の場」は沖縄全島レベルであった。コザから遠く離れた北部地域、南部地域の青年会であろうが、コンクールを目指して取り組みを始めたときからこのプレイフィールドの内側の存在になるのである。「太鼓を使用するエイサー」が従来は分布しない地域へとその版図を広げていったのも、競争の場へのエントリーフィーとして、太鼓を用いる踊りの採用が必須であったからである一審査規定にはそのような記述はないが、エイサーコンクールの場で太鼓を用いないエイサーが入賞を果たしたことがないという事実は、シマに伝承されている伝統的なスタイルを放棄し（北部地域の青年）、また、他の地域から新たに習い覚えてきて（南部地域の青年）、太鼓エイサーを採用する動機として大きかったと考える。

もちろん、開始当初から沖縄の2つの新聞社がこぞって記事にし、「メディア・イベント」として創られていったということもこのコンクールが影響力を拡大していった要素となろう。新聞社が参加者募集の記事を掲載し、出場チームを紹介し、結果について報じる。第8回からは琉球新報社が共催に入り、参加するチームの見所を紹介する記事に力を入れていった。このようなあり様も「甲子園野球」と重なるのである。

このように創り出された「地域の文化」を競争させるイベントは、一方で「自分たちのエイサー」を作るために多様な工夫を引き出し、他方で審査規定の枠組みや「入賞チームという範型」を示すことによって、地域ごとに多様でありながら一定の枠にはまる、「沖縄の伝統文化」としてのエイサー

一を生み出していったのである。「多様でありながら沖縄らしい」現在のエイサーは、こうして創られたと考えられる。

1960年代後末から1970年代にかけて、沖縄本島各地で催されていたエイサーコンクールは、順位付けを行う「競演形式」から順位を決めない「まつり形式」に変化していく。コザ市（1974年よりコザ市と美里村が合併し沖縄市となり、主催者も沖縄市へ）のエイサーコンクールも1977年の第22回大会を最後に「まつり形式」に移行し、23回からは名称を「全島エイサー祭り」に変更して現在にいたる。

コンクール形式は人びとの熱狂が大きかった反面、審査に不満を持った者が審査員に物を投げたり、青年が審査員の家まで押しかけるなどの事態を生じさせていた²¹。警察が出動し、審査に不満を持った青年会を収めたといった新聞記事もみられる²²。スポーツの中には体操やフィギュアスケートのように、技の難度や美しさについて審査員が点数を付けて勝敗を決する種目も存在するが、なぜエイサーの競演は、客観的な審査方法を探求し、「スポーツ化」することができなかつたのであろうか。ここには、民俗的な文化の「スポーツ化」の困難性という問題があると考えられる。沖縄本島各地で開かれていた競演形式のエイサーイベントが悉く「まつり形式」に移行してしまったことについては、当時の参加者などへ調査を実施し、稿を改めて論じたいと考えている。

【注】

1 池宮正治『沖縄の遊行芸—チョンダラーとニンブチャー』ひるぎ社、1990年。

2 小林幸男「エイサーの分類」沖縄全島エイサー祭り実行委員会編『エイサー360度』1998年。

3 各地のエイサーがいつどこから習い覚えてきたものなのか等に関しては、上記、沖縄全島エイサー祭り実行委員会編『エイサー360度』を参照のこと。特に南部地域については、歴史が浅い地域が多いため、どこのエイサーを手本としているかの情報が明確である。

4 「競演形式」から「まつり形式」への移行につ

いては、『エイサー360度』所収の拙稿「戦後沖縄社会におけるエイサーの展開」を参照のこと。

5 同上、51-52 ページ。

6 この時期、「銃剣とブルドーザー」と表現される強硬な基地拡大が米軍によってなされていき、これに反発した沖縄の人びとは「土地を守る四原則」を掲げ各地で集会を開いていった。この「島ぐるみ土地闘争」に対抗して米国民政府が行ったのが「オフ・リミッツ」という、米軍関係者の飲食店などへの立入禁止令である。実質的な経済封鎖として反発も強かったが、集会などを抑えるのに効果があった。コザ市のエイサーコンクールが開始されるのは、オフ・リミッツが解除された直後の時期であった。このような文脈において「琉米親善」を掲げたエイサーコンクールが開始され、米国民政府の高官が列席したという事実は、戦後の沖縄における娯楽イベントの政治的意味について考える上で興味深い。エイサーコンクールの成立については当時の政治的な文脈との関係で考えることについては、稿を改めたい。

7 琉球新報社『エイサー入門』、1984年、65-68 ページ。

8 コザ市『コザ市史』1974年。

9 『沖縄タイムス』1956年8月23日夕刊。

10 『沖縄タイムス』1956年8月27日。

11 青年会とは地域に住む青年の組織であり、参加資格年齢は各地によって異なる。多くの場合、高校卒業から30才程度までが対象となる。

12 『琉球新報』1958年8月31日。

13 『琉球新報』1963年9月7日。

14 「メディア・イベント」については、津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年を参照のこと。

15 『琉球新報』1963年8月31日。

16 『琉球新報』1964年8月15日。

17 『琉球新報』1968年8月25日。

18 『沖縄タイムス』1979年9月6日。

19 沖縄全島エイサー祭り実行委員会編、前掲書、251-252 ページ。

20 高校野球の歴史については、津金澤編著前掲書所収の有山輝雄著「全国優勝野球大会の展開と新聞—メディアがつくった野球」を参照のこと。

21 審査員を務めた元コザ市長の大山朝常氏は「コザ市長時代に催したエイサーコンクールの時、審査に不満のある民衆からコーラびんを投げつけられたことがありました」と語っている。沖縄全島エイサー祭り実行委員会編前掲書、312 ページ。

22 『沖縄タイムス』1967年8月28日。